

完璧生徒会長に告白&デート

なぜこうなったのだろうか？

月とすつぽん、清流と濁流、清水と汚泥。

容姿端麗、眉目秀麗、

あらゆる賛辞の言葉を並べても

言い表せない学園一の

美少女生徒会長・天夢^{そらゆめ}冴^さ依^え。

その彼女との信じられない経緯は、

昨日のお昼からだった。

「手紙をくれた門侯弘夢くんですね？」

「これから生徒会の用事があるの、
用事なら早く……」

「その、だから……
好きです付き合ってください！」



「……付き合っただけで欲しいうて、本気？」

（俺はなんでバカ正直に
告白してんだよ……っ！
天夢さん怒ってんじゃないかっ）

もっ

「うん」

もっ

「……く？ マジ」

「今までの人はフラれるのが怖くて不誠実だったのに
真面目に告白されたらわたし……」



「やったあああああああつ！
天夢さんが俺の彼女！
すぐにデートをしなければ」

「明日、遊園地に行こう！
決定、絶対行くぞ！」

かあぁ！

「わかったから
そんなに大きな声で喜ばないで、
みんなに聞こえてしまうわ」





狭いゴンドラ内で美少女と二人きり。

学園でも目立たない俺が
学園ナンバー1の美少女生徒会長と
観覧車に乗っている。

現実とは思えない状況だ。

「け、景色綺麗だね」

「ええ、まだ遠くは見えないけど……」

「冴依みたいな美少女と付き合えるなんて
夢のようだ、すごくうれしい……」

「また同じこと言ってるわ、
これで三十二回目よ……」





「嬉しくなんてないわよ、
何度も『夢のようだ』なんて、
恥ずかしくて迷惑なんだからっ」

（今パンツが見えた!!
太もも少し汗ばんでエロくて、
胸だつて揺れて……ゴクッ）

もう我慢できない。

おっ



「えっ？ きゃっ、ちよつと待つて！
なにをするつもりなのかしらっ」

「なにつてキス……」

「だからちよつと待つて……
きゃっ、今胸にふれて……」

「もう我慢できない、牙依が好き過ぎて、
キスしながらさわりたい！」



もじ

せい

「あっ、本当に待つて、
わたしたちまだ付き合ったばかりなのよ」
「こういうことはもっと時間をかけて……」
「お願いだから後で、せめてホテルとか
他人のから見えないところでしてっ」

せい……



「でも冴依のこと考えたら
我慢できなくて……」

「やつ、見られちゃう……
ダメだったらダメえええええっ！」



「ふがっ!」

冴依に思いつき突き飛ばされた。

「ごめんなさい……
だって急すぎたんですもの……」



「キスは今は我慢して」

「その代わり何かして欲しいことあったら
お託びにしてあげるから……」

「マイン」

鼻血の手当てをしてくれる冴依を見つめながら、
俺はある望みを彼女に伝えた。
ホテルに行きたい！



望みどおりにラブホテルにいった俺は、
鼻歌まじりに部屋に置いてある
エッチな小道具を物色していた。

「……………」

「ふっふっふんっ」

もじ

もじ

「弘夢……、ロムくん……、
これはいったいどういうことなのかしら？」

もう一つのお願いとして、
彼女だけの呼び名にした「ロム」を
回しながら見つめてきた。



「なに？ て、エッチの準備」

!?

「エッチって!?
確かにホテルに来たから、
そうなるかとは思ったけど…」

もレ

「いい、よく聞いて、
わたしたちまだ付き合って一日なのよ」



「時間なんて関係ないよ、気持ちの問題じゃん」

「そうね、確かに気持ちは大事よ」

「百万歩譲って付き合った翌日の
性交渉もありだと認めましょう、でもね……」



「これはいったい
なんなのかしらっ!」

「縄で縛られ胸や大事なところを強調した最高の姿、
どこも変なことではないじゃん」

「それが問題なのよ!
どこの世界にホテル入ったとたん
縄で縛る人がいますかっ!」

ここに在った縄を使って縛った美少女、
夢にまで見た最高に可愛くてエッチな姿だ。





「ホテルって言われたから
普通のところだと思ったのに、ラブホテルなんて……」
「ぐくっ、すごく柔らかいからさうせん、らららよね……」



「いよいよねって……えっ？」

「待って、その手はなにをしようとしているのかしら？」

「なにって、あまりにも無防備で、魅力的すぎて……」

ああん

「あんっ、んっ、
きゃんんんんんんっ！」

「すごい柔らかい、
手に合わせるように形が変わって
ずっとさわっていたいくらいだ」

「抵抗できないのにさわるなんて
あんっ、そんな強く揉まないで」

もみ





いっ

おい=
おい=

「胸はさわってもいいから縄をほどきなさい」
「怒られそうだからヤダ、
それに縄で縛った牙依すごくかわいらし」
「か、かわいいって……ちょっと手が」



あ

もど

むい

(パンツが……)

もつとよく見えるように……)

「んっ、どこを見て……」

ダメ、そこはまだダメえええええええつー!

ぐも

ぐも

おきっ

おきっ

はっ

「……うん」

「嬉しそうだけど、いったいどこ見てるのかしら」

「ど、えっ……ふんふん」

「わたしになにか言うことはあるかしら？」



「大好きな彼女とホテル来て、
こんな可愛い姿見せられたら
我慢なんてできないよ」

んっ...

ちど...

あゝ
あゝ

ちど...

「かわいいって……、
こんな縛られて下着見えてる姿の
どこがかわいいのよっ」

「すごくかわいい姿です！
パンツもすごく可愛らしくて、
夢見てた理想の女の子の姿だ！」





「そんな夢はすぐに捨てなさい！」

「捨てるなんて、そんなことできないー！」

「憧れていた女の子とエッチできると思うと、もう我慢できなくて、今すぐにでも……」



キッ

むにゅ

「あ、あの……、
怒っていらつしやいますか？」

「ええ、
今もわたしの胸を揉んでいる手も含めて……ね」

「い、ごめんなさい……だけど」



おは

おは

むにゃ

もぞ

「もうしかたないなあ、
そんなに言われたら断れないじゃない」

「え？ じゃあ……いいの？」

「……………」

恥ずかしそうにコクンと頷いてくれた。

「じゃ、じゃあその
……下着を……」

おい=
おい=

「ちょっと待って、その、
え、エッチしてもいいけど……
そのね……、だからその、
縄をほどいてくれないと、
わ、わたしなにもしてあげられない
……から……」

「やダ、このまましたい、
このまま縛られてる冴依と
初めてのエッチをするのが
俺の夢なんだから！」

もど……

もど……



「だからどんな夢なのよ変態！」

「だ、だってしてもいいって言ったから……」

さすがに拒まれた悲しみに涙ぐむ。

もふ

んっ

もふ

あ

ちど



「……も、もうしかたないなあ」

縛った彼女との初エッチ、
しかもそれが冴依なら最高の記念だ。
しかし、エッチはできても
縛った状態でなければ喜びは半減、
興奮だつて半減してしまう。

もどき

あ

ん

えい

もみ

は

もどき

もどき



すあ

おあ

「そ、そんなにこのまま
エ、エッチしたいなら、いいわ」

「ほんとにかっ!!
や、やった、やった~~~~~っ!」

呆れながらも微笑んだ冴依を
ベッドに仰向け寝かせ、
俺はきつくなったズボンから
硬くなったモノを取り出した。

ジ

カチ
カチ

もど

あ

びん

「そ、ソレがロムくんの……!」

弾けるようにズボンから飛び出したモノを見た途端、
冴依が驚いたような表情で見詰めてきた。

「そんなにまじまじ見られると恥ずかしいな」

おうう

ヒサッ



「冴依の姿見てたら
こんなに大きくなっちゃったよ、初めてかも」

「そんなに大きく……、それがわたしに……」



もど

もど

もど

もど

びん

「じゃあ、冴依のも……」

「え？」

「あ、ちよつと待って、まだ……」

彼女がとめるのも聞かず、
ショーツを横にずらした。

はっ

ふんふん

ふんふん

あっ



「すー……」

「そ、そんなに见ないで……、
恥ずかしくて、
わたし恥ずかしくてもう……っ」

恥ずかしさにコプツと愛液が溢れてきた。

ぱっ

くっ……♡

んっ

あ

ほっ



「すごく綺麗で……
ゴクッ、すごく興奮する」

「やだ……、
まだ胸も見せてないのに
アソコをこんなに……」

「いい……よね」

「ああっ!?
熱いのが、こんなに大きなのが
本当にわたしに入るの?」

んっ…

おめい





「た、多分大丈夫……
今から入れるから……
くっ、ううっ、くうううっ」

「アソコが拡がつて……
あくっ!? 大きいのが
お腹の中に入ってくる……」

おはっ

おはっ

びん



「そ、そこは、ロムくん
そこだけはゆつくり……
お願いゆつくり……
あっ、ひくっ……ああっ！」

初めての気持ちよさに
冴依を気遣う余裕がない。



「はくっ、うっ、
んううううううううううっ！」

我慢できずに腰を動かした瞬間、
先っぽが薄い障壁を破って
一気に奥まで入ってしまった。

あ

あ



熱い肉壁に誘われるように
二・三回腰を動かしてみれば、
頭の中まで痺れさせる気持ちよさが
股間から広がってくる。

「あくっ、あうっ、んううううっ」

「気持ちいい、
冴依の中すごく気持ちよくて
……ああっ!! ごめん、大丈夫?」





「ダメ、抜かないで……
大丈夫だから、
痛みなんてすぐに消えるから」
「ロムくんのしたいように
していいから」

おは

んっ…

ズッ
ズッ
ズッ

ズッ

「わかった、すぐに終わるから」

「うん……」

んっ

んっ

んっ

ちのぼ

今さらながら
初めてのキスをして舌を絡め、
半分ほど引き抜いたモノを
再び奥まで差し込んだ。



「んう、あく、んあああああつ、
あふつ、
んうっ、はくっ、んうっ、
あっ、はくうううっ」

「ああっ、気持ちいい、
奥まで届くと先っぽがジクジクして
壁がギュッギュッて締まって」

「んっ、あうううっ！
はくっ、はあはあ、大丈夫だから……
んうっ、わたし大丈夫だから気持ちよくなつて
ロムくんの好きなようにして……あああっ」



涙を流しながらも
俺の夢を叶えてくれる冴依に嬉しさが込み上げ、
少しでも早く終わらせようと腰を動かす。

「んっ、んうううううううっ！
あくっ、こんなお、奥まで……..
はくう、あうっ」

「気持ちいいよ冴依、すごく気持ちいい！
動かすたびに締まっで、
コリッとした奥の穴が吸い付いてくる」



「お腹の中ぐちゃぐちゃにされて、ああっ！
もうダメ、痛いのになんか
おかしくなつて、もうイッて、
わたしこのままじゃ
おかしくなっちゃうわ」

「んうっ、あああっ、あくっ、熱いっ！

痛いのに熱くて……

ああっ、お願いロムくん、

早く、早くイッて！」



「気持ちいいよ冴依、気持ちいい！
動かすたびに締まって、
奥の穴が吸い付いてくる」

「んううつ、はあはあ、
そんなに奥まで……
ああっ、ロムくんが
わたしの中でまた大きく……
あっ、んあっ、ああっ」

ほっ

あ

ヌルヌルとした
彼女の熱い体液と壁に、
硬く反り返った幹が
ピクピクと疼きだした。





「んう、あつ、あああつ！ そこは……

こんなところまで届くなんて知らなかった……

あくっ、深い、わたしの中

ロムくんではいっぱいになってる！」

「お腹の中ぐちゃぐちゃにされて、あああつ！

もうダメ、痛いのに

なんかおかしくなって、もうイッて、

わたしこのままじゃおかしくなっちゃうわ」

あ

は

ズ
ッ
ズ
ッ

「も、もう出そうだ」

「なにこれ、

ロムくんのが熱くなって、ああっ!!
お腹の中で大きく、まさか……」

「いくよ牙依、

これで俺たち本当の恋人に……
うああっ、くうううううっ!」

「んううっ、ま、待つて……」

中は、中はダメ……」

ああっ、あうっ、あっあっ、
はうっ、んうううっ!」

はっ

あっ





「んうっ、あふっ、
あっ、熱い……こんなに、
あうっ、中に……あっ、
あうっ、んんんんっ！」

んうっ

びゅん

びゅん

自分でも
信じられない量の
体液が飛び出す。

「これで最後……
くううううっ！」

「んうっ、あつ、まだ……
はうううううっ！」

最後の欲望を
冴依の中に吐き出した。



まだ大きいままのモノを
彼女から引き抜いた瞬間、
泡立つような音とともに
大量の精子が溢れてきた。

「んう……あっ……
終わった……の……？」

「ああ……
だ、大丈夫……かな？
血が……」



「だ、大丈夫よ、これくらい……
それよりも中に出したことを
心配して欲しいかしら……」

「え？ あああつ!!
俺気持ち良すぎて中に……、
その、どうすれば……」

「妊娠は大丈夫だと思うわ、
安全な日ではないけど、
そんなに経つてないから……」

「そ、そう……」



妊娠の確率が少ないと言われ、
少し残念な気になる。

もしできていれば、冴依と
このまま結婚できるかもしれない。

それを考えたら、
もう一度エッチして確実に妊娠するように
中に出したくなった。



自室に招いて目隠し&拘束プレイ

俺の部屋――。

『片付いているようね』

『さ、冴依……好きだっ!』

『え、なに? きゃあっ!』

ふふっ

ギャ

ギャ

冴依の姿に我慢できずに
昨日買った縄と目隠しを取り出し、
素早く拘束してベッドに転がして目を覆った。

「ロムくん、変なことしないで
約束したでしょう！
これ直ぐに解いてっ」

「だって、
冴依が誘ってるみたいにお尻
見せてたから」

「誘ってなんてないわ、
そういうことはもっと節度を持って
言ったでしょう！」

ドザッ



「せっかく縛ったんだから少しだけいいだろ、
エッチはしないからさ」

「冴依もSMの気持ちよさを覚えてよ」

「ん、ん、ん、ん、ん……っ」

もど……

ん、ん、ん

もど……

エッチはしない、
その約束で妥協したようだ。



「スクショしておきたいくらい可愛いよ冴依」

「写真はダメ、絶対ダメよ！
ねえもういいでしょう、
もう十分わたしを見たでしょう？」

「え？ まだまだだよ、羞恥で感じるのもSMなんだからこうしないと」

「え？ な、なにをするの？」
「やめ……きやあああああああつ！」

もど...

一は

いよっ

ゴゴゴゴ

拘束したまま
制服と下着を脱がした。

はっ

ああ…

あ…

あ…

「綺麗だ、すごく綺麗だよ冴依」

「見ないで、お願い拘束解いて、
もう恥ずかしくて死にそうだわ」



「冴依のここ、すごく綺麗だよ、
ふう~~~~っ」

「んっ、あっ、んあああっ！」

息だけでもかかわらずアソコが拡がり、
溢れてきた愛液がお尻の割れ目に流れた。

お尻

ひくっ

とろろ

んはあっ

「もう十分でしょう、
もうロムくんに見られてないところ
なんてないから……」



ブー...ブー...ブー...

5

「冴依も気持ちよさを覚えてよ」

一歩

力子



「こんなに入るなんて、
すごくエッチな形に歪んでるよ」

おおっ

おおおお

ガガガ

うん

ガガガガ

「はぐっ、んうっ、
あくうううっ、はあはあ、
そんなに见ないで……
うっ、んうううっ」





「氣持よくない？」

あ

「んうっ、あうっ、あくっ、
動かさないで……
あくっ、ひい、くう、うう、うう、ううっ！」

あ

ガガガ

うん

ガガガ

「まだ感じてないのか……、
ならこうすればどうかな？」

「んう、はあはあ、
まだなにかするの？」

「おっぱいなら
感じるかもしれないから」



彼女の不安をよそに、
新しいオモチャを取り出して
彼女の胸にテープで付けた。

「んあうっ!? 胸に……
乳首がくすぐられて、
あうっ、はくっ、はあはあ、
あっ、んんんんっ」

ガガガガ

ガガガ

くっく

くっく

ガガガガガガ

あっ

あっ

びくっ

「なんなのこれ、んっ、
お腹の中はまだ辛いのに、
胸がムズムズして……」



「気持ちよくなってきた？」

「わからないわ、
でもさつきより身体が熱くて
あんっ、お腹の中もおかしく」

「アソコより
おっぱいの方が感じやすいのかな？
ならこうすればもつと……」

あ

ガガガ

ガガガガ

ぐぐ

ぐぐ

ガガガガガ

やっ



ローターの強さを最大にまで上げてみる。

「んううつ、あつ、んうううつ！」

はうつ、はあはあ、

胸が……んつ、ああつ」

「やつぱりおっぱいの方が感じるんだ、
今ならここを強くしても感じるかも？」

ザグザグ

ザグザグ

ザグザグザグザグ

「ふ、ここもつて……んつ、
はあはあ、なにをしようとしてるの？
どこを強くするつもりなの？」



「どうって、当然こー」

「んううっ、はくっ、

んうううううううううっ！

お腹の中で……」

お腹の中が掻き混ぜられて

……あっ、んうううっ！」

んうう
ザザザザ

んうう

ザザザザ

んうう

ザザザザ

んうう

ザザザザ

パイプの強さを最大にした途端、
動きづらい姿勢にもかかわらず
お尻をくねらせた。



「お腹の中で……、
お腹の中が掻き混ぜられて
あつ、んううっ！」

「気持ちいいなら
我慢しないでさっさと」

ザザザザ

ザザザザ

ザザザザザザザザ

「気持ちいいなんて……..
お腹の中がジクジクして
胸が、胸が切ない……やあんっ」



「見てるでしょう、
わたしのアソコ、
絶対見てるでしょう」

「見てないよ、ふう~~~~っ」

バイブの刺激で
ふくらんだ陰核に
息を吹きかけた。

ザザザザ

ザザザザ

ザザザザ
ザザザザ

「そんなところに……
嘘つき、ロムくんの嘘つき」



新しいローターを
バイブの上で小刻みしていた
小さな突起に押し付けた。

「アソコが、ああつ、
これダメ、ダメえええええつ！
おかしくなっちゃう……」

「んあつ、あつ、
あああああああつ！」

ズバズバ

ズバズバ

ズバズバ

ズバズバズバズバズバ





「んっ、あんんんんんっ！」

あゝ

「冴依、気持ちよくなつたみたいだね、それじゃもつと気持ちよくなつて」

「あああつ、そんな奥……ああつ、震えてる、お腹の奥が震えて……」

あゝ

ザグザグザグザグ

ザグザグ

ザグザグ

ザグザグ

あゝ

あゝ

あゝ

「んうっ、あつ、はあはあ、んあああつ！
ろ、ロムくん興奮してるの？」

わたしのエッチな姿で興奮しているの？」

「興奮してるよ、すごく興奮してる」

「う、嬉しい……ロムくんがわたしで……」

ああっ、奥が……んっ、んううう、怖い、
なにか……ああっ、あつ、あああつ」

ズグズグ

ズグズグ

ズグズグ

ズグズグズグズグズグ

素直に興奮を伝えた途端、
パイプの隙間から
愛液が断続的に噴きだした。





「怖い、ギョッとして、
お願いロムくん、
ぎゅって抱き締めてっ！」

「ああ、助け……怖い」

「やだ、くる、

お腹の奥からすごいのが」

ズグググ

ズグググ

ズグググ

ズグググズググズググ

あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

アッパァ

アッパァ

アッパァ

アッパァ



「んっ、あああっ！
やっ、んん、お腹の中が痺れてとまらない、
とまらないのおおおおっ！」

またプシュツと潮を噴き出した。

「冴依のイッてる姿すごくて、
もう我慢できないよ」



あああ

びくっ

ガガガガ

ガガガガ

びくっ

ガガガガ

アッ

アッ

ガガガガガガガガ

びくびくっ

「んっ、我慢って……
ひゃんっ、あつ、な、
だ、ダメ、エッチはしないって
約束したのに……っ」

「そんなこと言っただって、
もう我慢できない」

おっ

ガガガガ

ガガガガ

ズンズンズンズン

ガガガガ

ガガガガガガガガ

おっ



「んっ、あっ、
んうううううううっ!!」

急いで縄をほどいておもちゃを外し、
バイブで柔らかくなったアソコを
大きくなったモノで一気に突き刺した。

んあっ

んっ

ズグググッ!



「変なことしないでっつて約束したのに
さっきのより大きくて
お腹の中が苦しい……」

「さっきのよりも奥まで突き上げて、
はあはあ、すごく熱くて……んううっ、
お腹の中がいつぱいに……ああっ」

「今の冴依すっごくエッチだよ、
お尻もアソコも丸見えで、
おっぱいも揺れてるのが見える」



「今ピクピクって……、
わたしのアソコが気持ちよくて
また出そうなのね？」

「ああ、すごく気持ちいいよ、
気持ちよすぎて腰がとまらない」

「んっ、う、嬉しい……いいわ、
ロムくんの好きな様にして
気持ちよくなってっ」





「うっ、ああ気持ちよくなるよ、
だから冴依も
もっと気持ちよくなってくれ」
「ええ、気持ちいいわ、
奥を叩かれると痺れて、
このままイッ……えっ!?!」
「これでもっと
気持ちよくさせてあげるよ」



んーッ!

「ま、待つて、んっ、
お尻なんて……ひゃうっ!!
だ、ダメ……お尻は、あ、ふあああ、
んうっ、んひひひひひひっー!」

んーッ!

少しの抵抗を感じたが、グイッと押し込んでパイプを突き入れた。

「すごい、全部入った、くっ、それにお尻に入れた途端に前もきつく締まって……、これすごく気持ちいい」

「んうっ、あっ、んううううっ、はあはあ、きつい……はうっ、アソコもお尻も苦しくて壊れてしまうわ……んっ、んううっ」

お万お万!

11
13
13
11

ま

井



「お尻はまだ気持ちよくないみたいだな、
ならさつきみたいにするば」

「んっ、ああっ、
さつきみたいにつて？」

浅い息を繰り返しながら
振り向いた冴依の顔を見ながら、
お尻に入っている
バイブのスイッチを入れる。



あ
あ
あ
!!

44

スイッチを入れた途端、
冴依が身体を震わせた。



「くっ、これすご、お尻のが俺のにまで擦れて、これ出る、すぐに出る！」

「んううううっ、あふっ、あっ、はうううっ、ロムくんのお尻のがわたしの中でぶつかって……ああっ、すごい……」

「すごい、んっ、んあぁあぁっ、
わたしも気持ちいいの、あんっ、
だからイッて、わたしの中でイッてっ」

言われるまでもなく冴依の中でイクつもりだ。

俺は激しく腰を動かしアソコを突き、
最奥への入り口に切っ先を叩きつけた。



「んああああつ、あうつ、あつ、あああああつ、
気持ちいい、奥痺れて……あんつ、
お尻もゴリツで、すごい、ロムくんすごい……」

バイブの刺激で完全に
お尻の気持ちよさを覚えてしまったらしい。

お腹の中を突き、うねる壁ごとお尻の中の
バイブと擦れ合わせるだけで冴依の身体が震える。





「うああっ、あふっ、
あ、頭の中まで痺れて……」

「ああっ、お尻の中が動いて、
ロムくんのが奥までくると
イク、イッちゃうのっ」





おおっ

「あんんっ!!」

「ロムさんの熱いのがまた、
またわたしの奥に……」

んっ、あっ、

あんんんんんんんんん

っ!!

ビクッ

んん
!!

ビクッ

セクッ
セクッ
セクッ

セクッ
セクッ

セクッ
セクッ

セクッ!!





ふあふあ

「んあつ、あつ、

奥に……ああつ、

ああああああああああああ

あああああ

「うー」

ぐん……

ぐんぐんぐんぐん

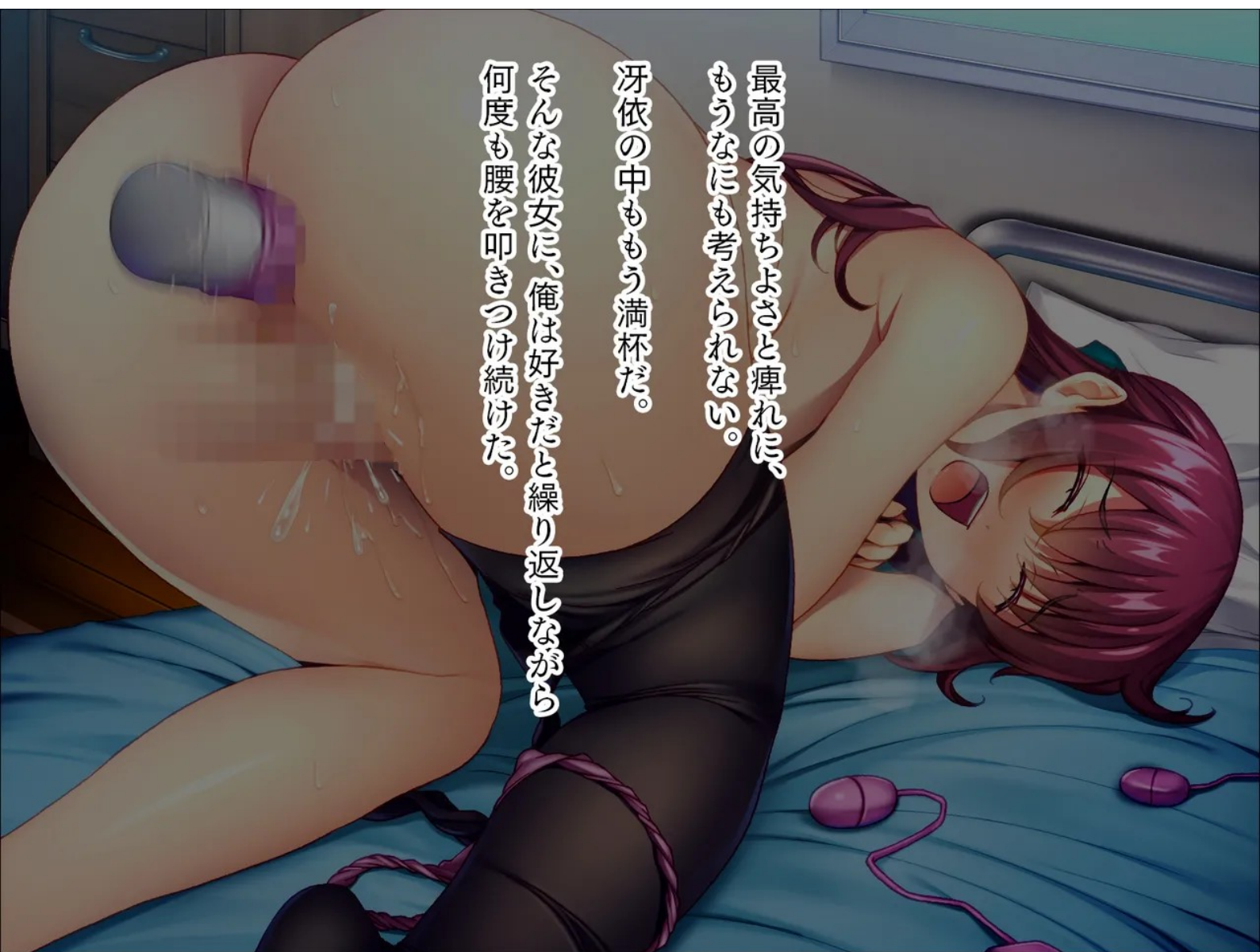
びゅるるるっ!

「最高だ……、
冴依大好きだよ……っ」

最高の気持ちよさと痺れに、
もうなにも考えられない。

冴依の中ももう満杯だ。

そんな彼女に、俺は好きだと繰り返しながら
何度も腰を叩きつけ続けた。



時計がそろそろ17時を示そうとしている。

『そろそろ生徒会の仕事が終わったかな？』

メールを開く。

『遅くなってごめんなさい、今終わったわ』

メールの文字だけで

俺を待っているのが伝わってきた。

俺は荷物を持ち、走るように生徒会室に向った。

ポイン

「冴依、帰る準備はできた？」

「次の会議の資料整理でもう少しかかるから、
そこで待っていてくれる？」

ガチャ

「さすが完璧美少女の冴依、真面目だな」

（この部屋、防音性は高そうだな、
それに冴依の机は大きくてエッチに使えそうだし）



「冴依、ここでエッチしたい、
パンツ脱いでその机で脚開いてくれる？」

「なにを突然言っているの!!
こんなところで出来るわけないでしょうっ」

あゝ

「我慢できなくなっちゃったし
冴依だって今日もすると思ってたんだろ？」

「~~~~っ、ロムくんのエッチ」



「おおっ、すごい姿！」

「冴依のこんな姿を見れるなんて夢のようだよ、それにすごくかわいい！」

「こんな姿褒められれも嬉しくなひっ」

「鼻も変ら音なつれ、恥ずかひいわ……」

んうう

ゲイ

ゲイ

しかし徐々にSMに慣れている身体はその恥ずかしさすら快楽に変え、アソコをヒクつかせた。



「冴依感じてる？」

俺に見られたここがヒクヒクしているよ」

「こんな恥ずかしいこと感じてらんで」

「誰か戻つてくふかもしれないのに……」



「やばっ、
もう我慢ができなくなってきた」

俺はズボンから
大きくなつたモノを取り出し、
冴依の小さな穴に押し当てて
グイッと押し込んでいく。

んっ

「んう~~~~っ、またそんなに大きく、
熱いのがまらんで、おひっ」

びんっ

ジ〜

カチャ
カチャ

ひっ

ひ





「うあっ、すごく絡まってきて、
気持ちいいよ冴依、すごく気持ちいい」

「んっ、んあああ……んひっ、はあはあ、
わたしも、はあはあ、わたしも全然痛くなふて、
お腹の中がムズムズするわ……」

ぐ
ぶ
う

「動くよ、
こんな気持ちいいアソコ
我慢できないよ」





「今お腹の中がぐりゅって、
熱いのが……ああっ」

「感じてる？ いつも澄ました顔で
仕事している机で感じてるの？」

「はうっ、言わないで……」

「いつもこれみんなとお話してるのに、
そんな場所でわたししてる」

はっ

あっ

ぐりゅ

ズッ
ズッ

ズッ
ズッ

んっ

「神聖な場所なのに……、
わたしここでロムくんを感じてる、
はあはあ、こんな姿れ……」

さつきまでの会議を思い出した冴依が
身体をビクンと跳ねさせた。

「また締め付けてきた、
冴依もSMに慣れてきたみたいで嬉しいよ」



「慣れてなんれ……ああっ、早くなつれ、
あっ、んんっ、ああっ……んっ、はあはあ、
ぶひっ、ひやうううっ」

「いつもここで難しい事を
話してる生徒会長がこんなに喘いで」

「明日からみんなの顔を見るたびに
思いたしちゃうんじゃない？」

「あああっ、言わないで……みんなの顔見るたびに
ここでエッチひたの思いたしちゃうっ」



「ああっ、お腹の中れ硬いのが動いれ……
ジンジンするの、わたしのお腹の中ジンジンする」

「ここでエッチしていると
衆人観衆の中で調教してる気分になつて、うっ」

「っ!? ああっ、調教なんて言わないで、
わたしだって同じこと考えてたのに」

あっ

はっ

調教という言葉に
冴依の力が強く反応して
締めつけてきた。

んっ

ズッ
ズッ
ズッ

「んあぁっ、あうっ、あっ、あっあっあっ、
奥に当たって、痺れちゃう、
お腹の奥が痺れて」

「もつと動いて、もつとおおっ！」

「ここだろ？ ここを強く突き上げると
中がすごく締まって吸いついてくるよ」

はっ

あっ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

「そこ、そこが感じるの、
ロムくんのが当たただけで
燃えてるように熱くなって」

んっ





「こんなに気持ちいひなんて、
ロムくん好きなの、ロムくんが好き」

気持ちよさに押されるように囁き、
彼女からキスを求めてきた。

ちゅっ

ずわう

はっ

まっ

くっ

くっ

おっ

おっ

おっ

んっ

あっ

「さっばら突っ込んで……気持ちいいの、
ロムくんの気持ちさっのっ」



「もうイッて……ああっ、
このままだとおかしく……」

「冴依、もう出る、
冴依の中よすぎてもう出る！」

ズンッ!
ズンッ!

ズンッ!

あ

あ

「あっ、あああっ、イッて、
わたしの中でまら、
わらしももう、
もうふダメ、もうイク」

は





きつく締まった膣に耐えられず、
根元まで挿入したまま彼女の中に迸らせた。

びくっ
ぐわっ
ぐわっ
ぐわっ

「はあはあ、んっ、はあはあはあ、
ロムくん……んっ、き、気持ちいい？」

「すごくよかったよ、だけど、
もう少し出るかも」

「んっ、ああっ、
誰か来てしまおう、だからもう、あっ、
んっ、あああああああっ！」

びくっ…

ああああ

びくっ…

ゴッゴッ
ゴッゴッ



とめようとする冴依の言葉も聞かず、
俺はすぐに精子を出そうと腰を再び振りはじめた。



エロSM衣装で盛大潮吹き

部屋に着くなり、
俺は買い集めたSM道具を漁って
彼女にピッタリの衣装を手渡した。

「……なんなの、これ？」

「ダメかな？」

!?

彼女に渡したのは
到底服と呼べる代物ではない。

テディと呼ばれる
胸や陰部を強調する拘束具のような物だ。





「うわっ、やっぱりエロい恰好、
あとは手を拘束して
これを引き上げれば……」
「えっ、なにを……ちよつと待って、
そんなの引き上げられたら……」
「やっぱりちよつどいい位置だった」

「本当に変な趣味ね、
こんなものを見て興奮するの？」

「今の冴依、
おっぱいが縛り出されて
大きく見えるし、
ここだつてこんな……」

冴依の大事な部分に喰いこんでいる縄を
軽くつまんで弾く。





「こんなに感じるんだ、
初めて見たよ」
「当たり前でしょう、
喰い込んでるだけじゃなくて、
アレまで擦れてるんだから」
「アレって？ ああ、本当だ」

「すごい状態、
ビラビラも見えてすごいエロいよ」

「そんなところばかり見ないで！
見られるだけでもわたし……」

「そのまま前後に動いてみてよ、
あとSM調教だから俺のことは
ご主人様って呼んでみて」





ああん

はっ

はっ

あ

あ

ゲイ
ゲイ

「このまま前後になんて……」

「擦れて……なにこれ、
アソコが熱く……ロムくん……」

ぐい

ぐい

ぐい

ぐい

ぎゅ

「ご主人様、じゃないと
疼かせたまま終わりにしちゃうよ」



「一番感じる場所なのに
乱暴にされるなんて……」

んうう

「んうううっ、はあはあ、
アソコが擦れて……」

ぽん

ぱん

ぱん

ぱん

ぱん

ぱん

ぱん

んん

んん

おは

おは





「おっぱいさわって欲しい？」

「思いつきりさわって、

ううん、さわるよりも吸って、

ロムくんの口で痛くなるまで吸って」

「ロムくんじゃなくて、

エッチの時はご主人様だろ」

お仕置きをするように冴依の背中を押し、
強引に縄の上を移動させる。

んっ...

おっぱい

くちゅ

にゅ

にゅ

「んっ、はひひひひひひひひひひ！
あ、アソコがズリズリって、あっ」

んっう

んはあ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「もつと大股で歩いてよ」

「そ、そんなことできないわ」

「そう、ご主人様のお願いを
聞いてくれないのなら……」









「んっ、あああっ、あっ、んうっ、
はあはあ、これまだ切ない、
アソコが切なくて、
んっ、んんんんっ！」

ああああ

「冴依がエッチすぎて
うっ、うっうっ」

冴依の視線を感じて
股間を押さえるが止まらない。

彼女が身体を痙攣させ、
胸を大きく揺らして潮を吹くたびに
俺のも爆発する。



「んっ、あぁっ、あっ、ご主人様……んんっ、
わたしを見てるだけで……ふふ、はぁはぁ、
次はわたしの中で、ね」

腰をビクッビクッと痙攣させながら微笑んだ
冴依に誘われるように俺は胸を揉み、
頂で震えていたピンクの突起に吸い付いた。

プニャッ！

くおしまっ

あぁあぁ

